えっ源石？そんなものより車とガソリンだ!!

悪魔の(BR)Z

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

様々な物質を無から産み出せる万能オリ主（車好き）をアークナイツの世界にぶちこんだ話。

早い話作者が車絡みの作品を見たかっただけ（笑）

なお作者はわりと初期からドクターしてるハズなのにまったく話を進められない底辺ドクターなので設定の雑さには目を瞑ってくださいまし（）

目次

part1 ―― 1
part2 ―― 8

part1

拝啓、お父様お母様。
今もお元気にお過ごしでしょうか？
私はどうやら死んだ直後に神様転生とやらに巻き込まれたようで異世界に転生しました。
幸いその異世界は我々の世界のゲームが元となっているようで成人するまでは然程苦労しませんでした。今世の親の協力がなければここまで順調にはいかなかったでしょう。彼らには感謝しかありません。
今は亡き今世の両親の力により、この世紀末すぎる世界でも毎度の如く波乱万丈な毎日を強制されてはいますが今もなんとか元気に活動中です。
え、今何をしているのか…ですか？

――盛大に死にかけてます☆
「うぉぉおおぉぉぉ!!頼むこの地獄を走り抜けてくれ俺のマイカーちゃんんん!!」
グァッとアクセルを踏み込めばマフラーから〝バァァァァァァァァァッ〟とド派手なエキゾースト音が発生し、さらに小規模だがアフターファイアの炎と爆音が発せられる。さすがは古の名車だ、俺の手で魔改造しただけあってその性能はそこいらの市販車に比べてあらゆる面で優れてる。
がしかし入り組んだ道路ではその馬力を十分に発揮する事ができず追っ手を引き離す事が出来ていない。追っ手が放つクロスボウの矢が無数に飛んできて俺の愛車ちゃんのリアバンパーに傷を…ってうわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
俺の愛車がッ!!
「ねぇねぇ追っ手来てるよ!?」

「エクシアテメェ早く迎撃しろ！てかしてくださいお願いしますアップルパイ奢るからぁぁぁぁ!!」
「あっはは～残念だけど私今弾切れなんだよねぇ～…」
「ふざけんな元はと言えばお前らがアイツらを引き連れて来たんだぞしっかり処理してくれ頼むからぁ！ぎゃあああまた矢が刺さった俺のマイカーアアアアアア!!!!」
　ちくしょう逃げてるコイツらなんか拾うんじゃなかった！コイツらと絡むとロクな事にならないのになんで関わっちゃうかなぁもう!!
「おい、追っ手が増えたぞ。」
「しかもえらい団体さんがな。」
「チキショオオオオオ!!!!こうなりゃ自棄（ヤケ）だ切り札ポチッとなァ!!」
　本来灰皿が搭載されている部分に増設したミニスイッチをオンに入れボタンを保護するカバーを外し力一杯押し込んだ。
　瞬間マイカーのバックドアが変形し、中からナニカが飛び出しルーフに固定される。
　それは本来この世界に存在してはいけないモノ、そして俺が造り出し俺だけが運用しているこの化け物溢れる世界でも切り札足り得る〝武器〟。
　銃身を切り詰めショートバレルに、機構を弄ってセミオート式に改造した１２．７ｍｍＮＡＴＯ弾を採用したこれまた古の名銃――ブローニングＭ２重機関銃だ。
「エクシア任せた!!」
「うひょおおおおお!!ガッテン承知！」
　エクシアがルーフの窓を開け飛び出す。あんにゃろうすーぐトリガーハッピーになるからセミオート化してもすぐに弾切れ起こしやがる。頼むから慎重かつ大胆に使ってくれ（矛盾）
「テキサスは周囲を見張っててくれ！」
「了解。」
　テキサスは目が良く鼻も効く、敵を見付ける事に関しては今最も頼れるだろう。それにエクシアのストッパーとして機能する…ハズ。

「…ん？ウチは？」
「お前（クロワッサン）は何もしなくて良いゾ。」
「仲間外れ!?」
しょうがないじゃん遠距離こなせるならまだしもお前ゴリゴリの前衛じゃん。それに今活用できるような能力も持ってないし。
だからそんな寂しそうな目で見るな。
とにかく準備は整った！
反撃開始じゃおどりゃぁぁぁぁ!!!!

～

――この世界に転生して早二十数年。
俺も若干どころか大分世紀末な世界観と生活にようやく慣れ、趣味に走れる程度には余裕が出来てきたと思う。
……いや訂正するわバリバリ余裕無いわ精神的に疲労しすぎてそろそろ鬱になりそうです誰かタスケテクレメンス。ボスケテ！
いやね？転生者らしく特典があったからそれのおかげでそこまで苦労するような事無かったよ？でも逆に考えるとこれがあるとむしろ苦労するって事に気がついたんですよ。
〝多少不鮮明でも強くイメージすれば様々な物質を無から生み出せる〟、それが今世の俺に与えられた転生特典という奴だった。人前ではかなり劣化させて「アーツです」と言ってゴリ押ししている。
チートだけあって非常に便利なもので、例え不鮮明なイメージでも強く考え「欲しい」と考えれば思い描いたソレを産み出せる汎用性の高いチート（ズル）だ。精密機械だと鮮明じゃなきゃ多少加工が必要になるが７～９０年代の車ぐらいなら多少余裕を持って作れる程度には補正が優秀でもある。
そう、比較的構造が単純な銃器やその弾丸であれば俺の集中力が続

く限り無限にポンポン産み出せる！高性能爆弾なんかもお手の物、なんなら機能するか怪しいが核爆弾だって作れるぞ！当然ガソリン燃料もいろんな種類を作ることが出来るので乗り物の燃料切れの心配は無い、まさしく万能の能力と言えるだろう！

そしてこれがお偉いさんにバレたら俺は十中八九確実に間違いなく本気（マジ）に狙われる！（迫真）

核爆弾とか何に使うんだよ爆撃機に取り付けて爆撃するつもりか？こんなエサを国々に与えたらただでさえヤバいのに間違いなくもっとヤバい事になるじゃん！

それに俺は現代医療に必要な機器と薬品をも産み出す事が出来てしまう…もうこんなの厄ネタの塊と言っているようなものじゃないですかヤダー！

なので武力方面は護身用に携えるだけで基本封印し今は趣味の乗り物製作に絞っている。あとは適当に活動地点である龍門全域で運び屋（トランスポーター）の真似事もしている程度で俺自体は何も悪いことはしていない。強いていうなら活動資金用に保存食を格安でスラムの奴らに売り付けているぐらいだ。

…のに、なんでかハチャメチャなアイツらと絡む事がなにかと多く何故か敵側から勝手にアイツらの仲間認定受けて〝仲間の仇だ〟と攻撃されたり…俺が一体何をしたってんだい!?

「ふぅ…あーあ、ボディにボコボコ穴あけてくれちゃってぇ。死んでなきゃ多額の慰謝料要求してる所だぜ。」

俺の愛車――スカイライン２０００ＧＴ―Ｒ、通称ハコスカは俺の手によって大幅に魔改造されている。

例えばシャシーは柔軟かつ頑丈な合金で構成することで重量はそのままに強度アップ、ホイールはチタン合金製のＲ３４純正ホイールでサスや駆動系もエンジンの出力に合わせた物に変更したためパワーを最大限に活かせる。エンジンも稚拙ながらに俺が調整したＳ２０型直列６気筒ターボ付きエンジンを使用、最大で３００ｐｓは出る。外装は防弾カーボンで出来ているので頑丈かつ強靭、当然防弾ガ

ラスなので簡単には貫通しない。その他にもいろんな部分に手を出しており最早原型を止めていない。
特典がなければここまでは弄れなかっただろう。
俺の持てる技術の粋を満遍なく使ったこの世界で1台だけ、俺のためだけのマイカーだ。前世では出来ないことを今世ではこうしてやれている、コレだけはこの世界に来て良かったと思えている。
修理が完了した愛車の車体を撫でながらニヤニヤと気持ち悪く笑う。男はいつだって自分のマイカーを見るときは気持ち悪く笑うもんさ（偏見）
……おれはコイツでドライブしたいだけなのになんでアイツらはメチャクチャやるんだろう。
関わらないようにしても気が付いたらアイツらの仕事に深く関わってるしもういっそのことあそこに就職しようかな…いや止めとこただでさえ高確率で壊されてるのにもっとひどい事になる。
「ヨシッ！そうと決まればアイツらの事は忘れて今週ぐらいはまったりドライブするか！」
思い立ったが吉日！さっそく作業着を脱ぎ捨てシャワーを浴び（余談だが部屋も俺が弄ったので風呂にも入れるし食事も現代日本らしいものが食べられる）私服にジャケットを着込む。
ウキウキしながら家のドアに鍵を掛け車庫に入り中に納めたハコスカに乗り込む。薄暗い車庫の中に入れた愛車から見える景色は最高だぜ。
上機嫌のままポケットから鍵を取り出し差し込みさぁエンジンを掛ける――その時だ。
ズガァァァンッと破壊される車庫。
「は？」
「ってて…ごっめーん！いきなりで悪いんだけどちょっとタクシー頼めない？」
「出来れば安全運転で頼む。」
「はぁ？」
「えっちょっドライバーに当てがあるってこれじゃただの強盗じゃな

いですか!?」
　爆破された車庫に飛び込んできた上に勝手に俺のマイカーに荷物らしきブツごと乗ってくるエクシアとテキサス。何か言いながら後部座席に乗ってくるのは新入りか、見覚えのない顔だ。
（――ああ、結局龍門に居る限り俺はコイツらから逃げられないのね。）
「……く、ククク…ハハハッ…アーハッハッハッハッハッハッハッハッ!!!!」
「…あ、あれ？おーい？」
「…。」
「あ、あの…これ怒ってるんじゃ…」
　ステアリングを握る。
　前回の反省を活かし、今回車体強度が大幅に強く固くしなやかになっている。おかげで猛スピードで人を轢いた程度じゃ簡単には壊れない。
　エンジンを点火するとド派手なエンジン音がボンネットの中から発せられた。フットペダルを軽く踏むと元気そうなエンジン音が発せられる。うんうん、今日も今日とて絶好調のようでなによりだ。
俺は絶不調だがな。
　ペダルを踏み込む。それだけでエンジンは一瞬でレッドゾーンまで吹き上がりマフラーからは炎が発せられる。銃声の如き爆音に思わず無断侵入してきた武装集団も次々に耳を塞ぎ外へ出ようとする。
「逃がさねぇ……皆殺しだッ!!!!」
「あー…こりゃマズッたかも。」
「…。」（無言で十字を切る）
「ちょっと!?これ大丈夫なんです――ぅぉっ」
　自分でも惚れ惚れするような完璧なロケットスタートをして――俺は目の前の邪魔な集団を勢い良く轢いた。
　血潮がフロントガラスに飛び散るが知ったことではないと言わんばかりに車を加速させる。
　アクセルをベタ踏みしつつサイドブレーキを使いながら滑らかに

ドリフトしてUターン、クロスボウを放ってくる生き残りをまた轢き殺しそのまま現場から離れる。あーあまたチェンにどやされる。
「で、行き先は？」
「…えっと、龍門東側に停泊しているロドスにお届けものを…ですね？」
「次からはアポ取れ、今回は特別に何時もの額でいいが次からは五倍は取るからな。」
「アッハイ」
「ちょっとエク姉！全然大丈夫じゃないじゃないですか!?」
「いや、何時もの事だし平気かなぁって…」
「いや駄目でしょ常識的に考えて!?」
「…食うか？」
「いやいい、今食ったらストレスで吐きそう。」
「そうか…」
　つーか行き先ロドスかよ、前に綺麗だけどおっかなそうなセンセの前で治療した時以来何かと目を付けられてるんだよなあ。まあただのドライバーってことで誤魔化してるケド。
　……俺、ただの車好きなんだけどなぁ。

ｐａｒｔ２

夜の首都高を走る旧車が１台、速度制限を無視したスピードで加速していた。

〝バァァァァァァァァァッ〟

高速道路の通る町に突如として鳴り響く爆音。その音量は世界が違えば『戦闘機が低空飛行してる』と感じさせるだろう。当然と言えば当然だ、なにしろそれは重さ約１トンもの重量を時速３００ｋｍで走らせる音だから。

そしてそれを間近に感じているトランスポーターの１人――バイソンは、既に３００ｋｍ近い速度が出ているにも関わらず〝怖くなかった〟。

いや、正確に言えば怖いのだがその恐怖はすくなくとも操作を少しでもミスれば一瞬でオジャンになる世界で感じるものではないのだ。

例えるならジェットコースターだろう、あれは一部の例外を除き〝確実に安全が保証されている〟からこそそこまで恐怖は感じない。どちらかと言えばスリルを感じるマシンだ。

今のバイソンはまさしくそれだった。

凄まじく安定したドライビングテクニックが恐怖を殺し、むしろ逆に今の状況を楽しませる。

普通なら失神するほど恐怖を感じるだろうが――運転手（ドライバー）の技量はそれを忘れさせむしろこの状況を楽しませる余裕を持たせるほど高い。

バイソンは純粋に尊敬の念を抱いた。エクシアたちから「凄いよ」とは聞いていたが、まさかここまで凄まじいとは思いもよらなかった。

「凄い…これが、３００ｋｍの世界…！」

「あはははは、最初はなるよね～」

「私は正直苦手だ。他人の車…というかコイツの運転が少し…いやだいぶ怖い。」

そんな世界で軽口を叩く彼らペンギン急便は今回の依頼主である〝ロドス・アイランド製薬〟、通称ロドスで雇われることが多々ある。依頼内容は主に武力介入であったり普通に配達だったりと多岐にわたるが、その過程で空を飛ぶ乗り物――輸送ヘリに乗ることはあった。

空を飛ぶ乗り物は基本的に速い。大概がそうしなければ墜落するか大金を使って飛ばす意味が無いからだ。

しかしそんな彼らでも地面を這うような低さで時速３００kmの世界を体験することは無い。

物凄いスピードで迫って来るコーナーの壁、まるで止まっているかのように見える他の車たち、僅かな地面の起伏から起こる体の芯にまで響くような振動。

その何れもが空を飛ぶだけでは味わえない、初めて味わう〝スリル〟だった。

――ふと、バイソンはそこで違和感に気付く。

『高速に入る直前までぐちぐちと文句を垂れていた運転手（ドライバー）がやけに静かだな』と。

チラ…と、バックミラーに写る運転席に座る彼…運転手（ドライバー）の表情を見るバイソン。

今度は先程とは逆に、戦慄の感情を抱いた。

（――嗤って、る？）

笑っていた。彼は口角を上げ、歯をむき出しにしてニタァと笑っていた。まるで「心底楽しくて仕方がない」と言わんばかりの、子供の笑顔のような…そんな無邪気さを感じる笑顔だった。

そこに感じるのは、狂喜だ。

狂いそうな程の、体を引き裂かんとするほどの歓喜の感情を彼は感じている。しかもまだ会って数分程度のバイソンですら彼が『まだだ、まだ物足りねェ』と強い欲求不満を抱えていることすら理解できてしまった。

そこまで考えた所でバイソンは認識を改めた。

（この人も大概イカれてるんだなぁ…）

そりゃこんなクレイジーな会社と良く一緒に働いてるんだからこの人だってどこかしら頭のネジ外れてるよなぁ、バイソンは急に熱が冷め始めた。
そう言えば先程、テキサスが「コイツの運転は怖い」と言っていた。コレが？と少し前までは思っていたがようやく理解した。
あ、これまだ本気じゃないな…と。
バイソンは急に憂鬱になってきた。

～

（来たッ右カーブ……!!）
極限にまで研ぎ澄まされた集中の中、思考がエンジンのように高速で回転する。
視界に迫るは高速道路に作られた壁、曲がらなければ当然壁にぶち当たる。
そうなれば来るのは〝死〟だけだ。
〝ガチャッ〟
クラッチペダルを踏み込みアクセルペダルから足を浮かす。その際シフトレバーを早くそして精確に操作してギアを一段下に変更する。
キュルルルルルッ
するとエンジン内に燃料と酸素を供給していたキャブレターのスロットルが閉じ、ターボチャージャーが送っていた酸素が逆流する現象…バックタービンの音が発生した。限界寸前までカチ回していたためタービンも超高速で回転していたのだろう、ものすごい音だ。
踏み込み過ぎないよう慎重にブレーキを弱めに掛けつつスピードをタイヤが食い付くギリギリまで落としコーナーに入る準備をする。ステアリングを握る手が汗ばんだ気がした。
視界に迫るコーナーの壁、ステアリングを回し他の車両を避けつつ

滑らかに曲がる。そして立ち上がりでエンジンの回転数を合わせるようにクラッチを繋げつつアクセルを踏み込む…が。
（――チッ、また失敗だ。）
イメージと体にズレが生じる。
そうなればあとは一瞬だ、絶好調だったエンジンの回転数が想定よりも低くなる。
しかしそこは馬力でカバーする。車重約１１００ｋｇの軽量ボディとリミッターを外し５００ｐｓ前後まで練り上げたエンジンパワーはコーナーの立ち上がりで一気に加速し直線に入れば直ぐに２００ｋｍオーバーに達する。
――が、加速はそこで打ち止め。楽しかった瞬間に別れを告げエンジンが壊れないようジワジワとした冷却も兼ねた巡航走行に切り替える。
「そろそろスピード落としても問題ねぇだろ、奴ら完全に俺たちを見失ってる。見付けられるとしたら道封鎖されてた時ぐらいじゃねーかナ。」
「あ、本当だ…」
当然だ、龍門のギャング程度が乗るほぼノーマルで無改造の高級車風情がこういった首都高で〝命を削ってでも速く走れ〟という願いを込めて改造を施した俺のマシンに追い付ける訳がない。
下りの峠ならまだしもここでは技量なんざ関係無し、完全に車の性能が物を言う世界だ。自分の財力を見せ付けるためだったり組織の面子のために金を費やした車と性能のために金を費やした車とでは当然天と地程の差が生まれる。（まあ俺は金掛けてねーケド）
それにあっちはせいぜいが２００馬力程度、こっちはリミッター解除にＮＯＳ噴射を重ねれば限界を越えて最大で約６００馬力にまで引き上げられる車重約１トンのモンスターマシンだ。相手が悪すぎたな。
しかしこれで完璧という訳ではない。俺がまだまだ未熟者なだけで、実際の所エンジンの性能をまだ完全に生かしきれていない。もし俺が凄腕のチューナーで車の未来を考えないバカだったならコイツ

は１０００馬力を越えるであろうほどのポテンシャルを秘めている。そんなエンジンに完璧な空力制御のエアロと駆動系を組み込めればもっといい仕上がりになるハズだ。

しかし俺はまだその領域に至っていない。

くうっ俺もまだまだ未熟者、もっと良いチューナー目指して精進するしかねぇなぁ！なお見ての通りの未熟者なモンだから多少無茶しただけでエンジンに相当な負荷が掛かってます（）

「ぬぅ……ロドスに付いたら工房借りれるかまた聞いてみようかな……」

「へ？何か、あったんですか？」

お、ボソッと呟いた一言に新人君が反応した。

何々？もしかして車に興味が…と思ったが走ってる最中に止まって欲しくないだけか。マシントラブルは運び屋（トランスポーター）にとって最も避けたい事態だろうしな、立派に仕事人してるなぁ。

「別にまだ大丈夫さ。たださっきので相当無茶したからな、エンジンはＯＨ（オーバーホール）確定だ。」

「おーばーほーる…って、ＯＨ!?エンジンを!?

で、できるんですか？」

「できるも何も俺がこのエンジンを作ったんだぞ？」

正確に言えば〝この世界でこのエンジンを最初に作ったのは〟、だけどね。他にも４ＡＧとかＲＢ２６とか有名なのを形だけでも作ってみたが、どうも難しくてな。結局好きだった車に逃げちまったし。……帰ったらハチロクも再開しようかな！

…？後ろに乗る新人君が妙に大人しい。もうちょっとリアクションしてくれてもいいのよ？

と思いバックミラー越しにチラリと見てみると…なんか新人君が『マジかよ』って顔してる。

なんか失礼な奴だなコイツ。真面目不遇枠かなって思ってたけど立派にペンギン急便やってんなお前もな？

「ロドスもそうだけど、なんでこの世界に居る科学者とか研究者ってのはこうもアグレッシブなんだ……って言うか今さらですけどこの

レベルのエンジンを組めるのに国に公表しないんですか？普通に偉業レベルじゃないですか。」
「なーんか本人が公表する気ないからねぇ。私それ前に言ったんだけど『コイツは特殊すぎて俺にしか使えねーヨ』とか言ってたよ？」
「それにこのエンジン、他の源石（オリジニウム）エンジンと音が違いすぎる。やっぱり別物なんじゃないのか？」
「ハハハッオウキノセイダゼソリャ。」
「そうか…」
どうにもこの世界に存在するエンジンは車用のものでは３００馬力がやっとらしい。ヘリコプターレベルに大型化すれば余裕で大馬力になるようだがそうすると今度は貴重な燃料――源石（オリジニウム）がすぐにスッカラカンになるようだ。この世界で源石をたらふく蓄えられる所なんて限られてるし他にも用途がある分すさまじく値段が張るしで燃費が悪化する大型エンジンはそこまで研究されてないようだ。
ま、火薬にも燃料にも何にでもなる万能さを持つ鉱石なモンだからそりゃ貴重にもなるか。
俺は使わねーけどネ。（笑）
というか当たり前だけど源石なんか給油しちゃったらエンジンが壊れちまうよ。何しろ燃料への点火方式からしてまったく異なる性質だからな、シリンダーに入ったらその時点でオシャカだ。
そう言えば一時期この世界の乗り物が気になって調べたことがあったな。結構似通ってる部分が多くてビックリした記憶がある。
まず燃料をエンジンのシリンダー内で燃焼させるサイクルはガソリンと変わらない。違いがあるとすれば点火プラグが電気系ではなく〝アーツ発生装置〟によって点火してる点だ。やはりこれは源石がアーツでしか燃焼しないからなんだろう、アーツを使わなければ源石は爆発もしなければ燃えることすらない。
で、エンジン始動と同時にアーツ発生装置が源石を爆発させることでシリンダー内でピストンを回転させる。その際発生した力を駆動系に伝えることでタイヤを回しこの世界の乗り物は動いてる、という訳だ。

ここまでなら本当に遜色ないように聞こえるだろうが実はこのエンジンには少しだけ欠点がある。
それはアーツにより点火した源石はよく燃えるがその燃焼には限界がある、という点だ。
先程言った通りこの世界のエンジンは車用のものでは３００馬力が限界だ。それは何故か？簡単だ、ターボやスーパーチャージャーではエンジンの性能を上げられないから。
ターボもスーパーチャージャーもどちらも酸素を多く供給するパーツだが、源石の燃焼はアーツによるもので酸素を多く入れただけでは燃焼は強くならない。だからこそ源石の爆発をアーツで強化するしか馬力を上げる方法が無い。で、当然限界が来てそれが〝３００馬力〟という壁に繋がる訳だ。
これがこの世界の車だ。だからこそこのサイズでも頑張れば１００馬力をも越えられるポテンシャルを持つこの車にあの程度の連中が追い付ける訳が無いのだ。俺に追い付きたけりゃ悪魔のＺかブラックバードでも連れてくるんだな!!
――おっと、少しの間情報を整理していたらどうやら終点が見えてきたようだ。
視界に映るのは移動都市〝龍門〟の東区画に停車したこれまたすんげぇデカイ、それこそ移動都市に匹敵しうる大きさの建造物が見えてきた。
アレが今回ペンギン急便に依頼をした連中の居る移動都市並みにデカイ施設だ。
中に居るのはそんな建造物にも負けず劣らない大きな志を持った組織――通称、「ロドス・アイランド製薬」があそこに存在している。
……良く考えなくてもただの製薬会社がこんなモン所持してるっておかしくね？と思ったがファンタジーな世界だし考えないようにしよ。調べたら消されそうだし…
「お前ら、もうすぐ着くぞ～。あと毎度毎度言っとくが帰りは乗せてやんねーからな。」
「分かってるってばぁ。そんなに信用ない？」

「お前らのドコを信用しろってんだヨ。俺は今朝のこと忘れてねーからな。」
「ああもう悪かったってぇ…このとーり！」
「すまなかった。」
「いや、本当にお二人がすみません…」
「まあ新人君に免じて許してやる。」
「ちょっと～？なぁ～んかバイソンにだけやけに優しくな～い？」
「ハハハッオウキノセイダゼソリャ。」
　そんな風に談笑しながら龍門の検問を抜け移動都市の外に出る俺たち。遠くから見ると近いように見えるけど実はロドスの停泊地点ってわりと遠いのよね、車使わないと面倒な距離って感じ？
　んで、ロドスの駐車場に繋がる道路を通ってあとは窓口の方までコイツらが行けば俺の仕事は終わ――
「――げぇっ…!?」
　口からなんか変な声が出る。でも今はそれを気にしてる場合じゃねぇ!!なぁ～んか入り口にやけに見覚えのある最も会いたくねえ奴の顔が見えるんですけどォ～!?
　あっしまったビックリして急ブレーキ掛けちゃったからその音に気付いてこっち見てる!!イヤァーッ!!なんかこっちに向かってめっちゃ走って来てるぅ―!!!
「ちょっ、どうしたんですか？」
「い、いや、なんでも…ごめんやっぱなんでもねぇわちょっと席変わって！」
「へ？え!?ちょっ運転は!?」
「知るかっテキサスにでもやらせとけ!!」
　こんな所に居られるかっ俺は隠れるぞ!!
　しかしその行動は時既に遅くバンッと窓になにかが張り付いてきた！チラッとそこを見れば爛々と輝く紅い瞳ッッそして見覚えのある黒髪の女の顔が――!!
「居たァー!!今日こそは私の工房に来てもら」
「あぁらよっと」

「ちょ!?ちょーいちょいちょいまち?まだ私たち会話すらしてないしっておいちょっと待ってってせめてこっち見なさいよ無言で発進するなッちょちょちょちょおいこら待てっ待ちなさァーいっ!!」
　ぺっ雑魚が…俺と張り合いたいなら１０００馬力のモンスターマシンを持ってくるんだな…!!
「…あの、今のってクロージャさんでは?」
「知らん。」
「……何かあったんですか?」
「無い。」
「……仲、良いんですね。」
「はぁー????俺とアイツのどことナニが良いってェー??全然俺アイツ嫌いだしアイツも俺の体目当ての変態マッドサイエンティストで仲が良いんじゃなくて俺のナニ目当ての変態に俺が追いかけ回されてるってだけのふざけた――」
「ああはい分かりましたもういいです…」
「何なんです、あれ?」
「さぁ?…まっなんかあったんでしょ。ナニ目的なのかは別として。」
「まて、ナニってなんだ?どういうことなんだ?」
「知らなくて良いと思うよ。」
「????」
　プン、まあアイツは厄介だからな、ここいらで距離を離してささっと帰らねぇと後々面倒なことに――
　ん?何だ?何かが近付いてくる!?
「私がなんの対策もしていないとでも思ったのかこのヴァカめェ――!!」
　ゲゲェーッ!?
　コイツッッッバイクで追いかけて来やがった!?
　こうなりゃ必殺技を使うしかねぇ!!
「誰か助けてェーッ!!変態です!それも極めて特殊な変態に追いかけられてます!!誰か助けてェー!!」
「誰が変態だァ!!」

うるせぇ薄着着痩せデカ乳女!!そのドスケベな格好で変態じゃないは無理だろ!!!（そうでもない定期）

ロドスの外周を回りながら追いかけっこを続けること十数分、騒ぎを聞きつけたアーミヤＣＥＯとケルシーにクロージャの奴は連行されていった。

がしかし何故か俺までもケルシーに連行され長々とした説教を聞かされた件。

なんで?????